

人間は不安の器

渡辺利夫 (拓殖大学学事顧問)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際経営学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十二月より現職。

もう二十数年も前の話だが、私は『神経症の時代』という本を出版したことがある。サブタイトルは「わが内なる森田正馬」である。五十年代半ばの頃、あるきっかけからひどい神経症に陥り、前途が暗闇に包まれるという経験をしたことが私にはある。暗闇から脱出できたのは、森田正馬という日本独自の精神医学に黎明を告げた一医師の著作に深い感銘を受け、氏の説くような生き方にめざめたことよってであった。

人間には誰しも「生の欲望」と同時に「死の恐怖」がある。前者が強ければ後者も強い。強い生の欲望にしたがって生きていく以上、人間が死の恐怖から自由になることはできない。これが人間感情の「本然」であり、この本然を「あるがまま」に認めて生を紡いでいくより他ない。森田は「不安常住」が人生の真実だという。森田の第一高弟の高良武久は「人間は不安の器」だと記す。

不安は、実に厄介な気分である。自己の不安の原因を自分の中に見出すのではなく、時に他者の中に

求めよう、そういう気分の人々を誘うことがある。その他者を非難したり攻撃することによって自己の不安を払拭したいという衝動に駆られる。人間心理の不条理である。

コロナ感染の拡大の中で私が最も深刻だと予感するのはこの心理である。感染者を排除し差別しようとする人々の御し難い心理の深層である。この不条理な心理を何とかして制御できなければ、わが社会はどこまでも深い闇の中にはまり込んでいかざるを得まい。闇はトラウマ(心的外傷)となって、将来の日本人をも苦しめることになろう。東日本大震災の過酷な記憶は今もフラッシュバックされ、これに多くの人々が苦しめられている。

新型コロナウイルスの拡散に人々は怯えている。ウイルスの拡散はまぎれもない脅威だが、脅威は脅威としてこれを「あるがまま」に認めようではないか。そしてこれが非理性的な心情へと人々を誘うことのないよう、特にジャーナリズムの報道の在り方には深い自省を求めたい。